
僕が見つめる先に

-SKY-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が見つめる先に

【Nコード】

N9207G

【作者名】

- SKY -

【あらすじ】

ずっとすきだった人と、思いがけず二人きりになった渚。このまま何も言わなければ何も変わらないと思い、思い切って声をかけてみる。そして…。

後ろに誰かの気配を感じた。

さりげなく振り向くと、そこにいたのは大樹だった。

背中が妙に緊張する。

大樹の目に、あたしはどう映ってるんだろう。

高校のときから、ずっと気になってた。

クラスは一緒になったことなかったけど。

大樹は、あたしの友達と同じクラスで。

何度か見かけるうちに、気付いたら目で追うようになってた。

あたしがこの大学に入ったのも、実は大樹に合わせただけ。

友達にこっそり聞いてもらった、大樹の志望校を頼りに。

だけど、大学が一緒だからって、学部が一緒だからって。

話をするわけでもないし、すれ違ったって挨拶もしない。

高校のときだってほとんど話もしたことなかったから、しょうがないけど。

それでもあたしは、こうやって偶然会える日を楽しみにしながらやってきた。

もうすぐエレベーターが降りてくる。

さっき振り向いたとき、後ろには大樹以外いなかったから。

このまま誰も来なければ、もしかしたら。

二人きりかもしれない。

ゆっくり開いた扉。

中には誰もいなくて。

奥にある鏡に映ってたのは、あたしと大樹だけだった。
そのまま乗り込んで、三階行きのボタンを押す。

大樹は、四階。

こんなに近くにいれるのは初めてだから、大樹の全てを目に焼き付けたくて。

大樹の一挙一動が気になった。

今日は格好良い服着てるなとか、頭搔いてるなとか。

このまま、ただ二人きりでいれる時間をゆっくり感じたかった。
でもそれじゃ、今までと何も変わらない。

「おはよう」って言葉さえ交わせないような、そんな関係のまま
なんだって。

そう思うと、不意にこの沈黙を破ってみたくなった。

「ねえ。」

「ん？」

突然話しかけたあたしに、大樹は驚いてた。

俺に話しかけてんの？って顔してる。

二人きりなんだから、他にいるわけないじゃん。

「もうすぐ、教育実習なんだってね。」

うちの大学は、教育学部だからって全員が教育実習に行くわけじやなくて。

あたしは教員免許を取らないから、実習には行かないけど。

「ああ、うん。」

ぎこちない大樹の返事に、妙に傷つく。

二人の距離が悲しかった。

こんなに近くににいるのに、全然遠い。

「うちの学科にも、実習行く子がいて。何か大変そうだった。」

あたしから話しかけといて、沈黙は気まずかったから。
早口でそう、言ってみた。

そしたら大樹は、

「ああ……。指導案作りとか色々あって、ホント大変。」
落としたように笑って、そう答えてくれた。

その笑顔が、他の誰のためのものでもなくて、あたしにだけ見せてくれたものだったから。

あたしも思わず、顔が緩んだ。

普段は愛想がない大樹だから、こんなちょっとした笑顔でも嬉しくなる。

この笑顔を、誰にも取られたくないと思った。

先輩が言ってた。

教育実習では、実習生同士での恋愛はよくあるんだって。

何週間もずっと一緒にいて、辛いこととか楽しいこととか共有するから、それも当然かもしれない。

それを目当てにしてる人もいるって聞く。

大樹はそうじゃないって信じたいけど。

それでも何も無いと言い切れない。

女の子の方が大樹を好きになるかもしれない。

あんまり喋らなくて、無愛想だって誤解されやすい大樹だけど。

実習の間ずっと一緒にいれば、大樹の良さに気付く子がいるかもしれない。

それでも、あたしの方が大樹の色んな顔を知ってるはず。

そう信じたい。

四年もすぎだったんだから、今さら他の人に取られたくない。

実習が終わって久々に大樹に会えたと思ったら、隣で女の子が笑ってる。

そんなの見たくないよ。

「ねえ…。」

もう一度、さっきと同じように話しかけてみた。

「ん？」

今度はさっきより少しやわらかい顔で答えてくれる大樹。

エレベーターはもうすぐ三階に着く。

「あたしね、大樹のこと、ずっとすきだった。」

一言一言、ゆっくりと。

「高校のときから、ずっと。…それだけ、知っててほしくて。」

言い終わる頃にちょうど三階に着いて。

あたしは俯いたまま、足早にエレベーターを降りた。

大樹の顔は見れなかった。

そのまま教室に入って、一番に沙希に言われた。

「おはよ。何か顔赤いね。大丈夫？」

沙希にはずっと大樹のこと相談してきた。

でも、さっきのことはまだ言っ気になれなくて。

なんでもないよって、適当にごまかしたけど、変に思われたかもしれない。

授業はずっと上の空で。

何であんなこと言っただろうとか。

どうせ言うなら、もっと可愛く言えば良かったとか。

そんなことばかり考えてた。

そのうち、今までの大樹との思い出も浮かんできて。

思い出っ言っても、遠くから見たりとか、廊下ですれ違った
りしただけのものだったけど。

一つ一つ丁寧に思い出しながら。

大樹はあたしのこと、どう思ってたんだろって考えてた。

そうやってるうちに授業は終わって。

沙希と一緒に、教室を後にする。

廊下を曲がってエレベーターの前に着くと、大樹がいた。

「ごめん。先に帰ってて。」

沙希に向けたその言葉は、心なしか震えてた。

あたしがすきだった人が、あたしを待ってる。

本当なら、何か進展があったんじゃないかって思われるような場面だけだ。

あたしの妙に緊張した顔が、その想像を打ち消してたんだろっ。

沙希は、ただ頷いてくれた。

「後で話すから。」

小声で沙希にそう言くと、沙希は階段を降りだした。

エレベーターを待つ時間があたし達の邪魔になると思って、気を遣ってくれたみたい。

沙希を見届けてから、大樹の方を向きなおす。

大樹が降りたのは四階だったから、大樹がここにいるのは偶然じゃない。

あたしを待ってたはず。

そう思って大樹を見ると、

「向こうに行こう。廊下は声が響くし。」

大樹が指差したのは、扉の向こうの渡り廊下。

あたしが黙って頷くと、大樹はゆっくり歩き出した。

渡り廊下の中央辺りまで行って、大樹は止まった。

「さっきのこと、だけど。」

「うん…。」

「俺も、広瀬のこと、すきだった。」

もしかしたら言ってもらえるかも、なんて淡い期待を抱きながら描いてた言葉。

それが今、大樹の口から。

「付き合ってほしい。」

少し目を背けながら、顔を赤くして言う大樹。

今まで見たどんな顔より、愛しく思えて。

「うん。」

そう言いながら頷くのが、精一杯だった。

あたしの方からすきだっていつておいて「付き合ってほしい」って言われるなんて。

何か変な気がしたけど、でもそんなのどうでも良かった。

もう一度大樹を見ると、目が合った。

でも顔を赤くしたままの大樹は、すぐに目をそらした。

普段クールなくせに、こういうことにはすごく照れる。

けど、そんなところがすき。

「今から、どこに行く？」

ドキドキする気持ちを抑えながら、そう言ってみた。

「あ…、ごめん。今からはちょっと用事あって。」

空振り。何か、格好悪いな。

「広瀬は、三コマ目って授業ある？」

「えっ…、ううん。ないけど。」

「じゃあ、昼一緒に食べに行かない？俺、今日は午前中で終わりだから。」

「あ、うん。」

「じゃあ、アドレス教えて、終わったらメールするから。」

妙に早口で、目を背けたまま話す大樹。

可愛いなと思いながら、言われるままにアドレスを交換する。

「そろそろ行かないといけなから。…じゃ、何食べたいか考えて。」

そう言っ て急ぎ足で向かう大樹の後姿を、ずっと眺めてた。
見えなくなっても、ずっと。

それから、まだ少し放心状態のまま、沙希に電話した。
朝のこととか、さっきのこととか、これからのこととか。

何から話していいかわからなくて、ぐちゃぐちゃになっただけ。
とにかく、上手くいったってことは伝わったみたいで。

沙希は自分のことのように喜んでくれた。

それがまた嬉しくて。

気付いたら、景色が少し滲んで見えてた。

（後書き）

タイトルの「僕が見つめる先に」は

Every Little Thing さんの「恋文」の歌詞の
中からいただきました。

よければ「恋文」を聞きながら、読んでみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9207g/>

僕が見つめる先に

2010年10月8日15時08分発行